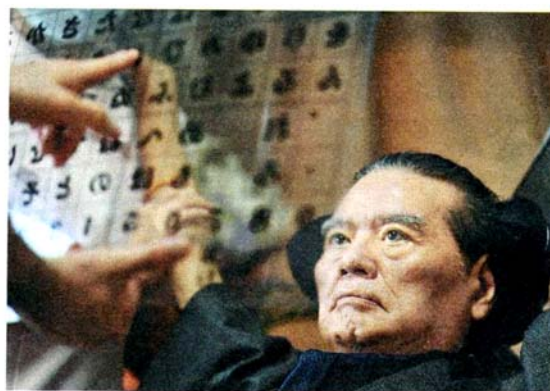


筋肉の萎縮「まさか僕が」

神奈川県鎌倉市の北部にある湘南鎌倉総合病院。救急患者の受け入れを断らず、年間救急車搬入数が1万3000台と全国有数の同病院は、国内66病院を展開する徳洲会グループの中核施設だ。

最上階の15階には、特別な部屋がある。入り口で靴を脱ぎ、フロアリングの床に上がる。すると、縦長の部屋の奥から「アシュー、シュー」という規則的な音が聞こえてきた。人工呼吸器の作動音だ。そこに、一代で巨大医療グループを築いた徳洲会理事長、徳田虎雄さん(74)がいた。



文字が書かれた透明なボードを持ってもらい、視線の動きで会話をする徳田虎雄さん(神奈川県鎌倉市の湘南鎌倉総合病院で)＝上甲鉄撮影

がノートに書き留める。

唯一、自在に動く眼球を使い、会話をしているのだ。一文あたりの所要

時間は2秒弱とかなり早い。この繰り返しで言葉ができていく。

「今は、元気な時よりも規則正しく文化的な生活を送っています。これからは人生の勝負」

徳田さんの病は、筋萎縮性側索硬化症(ALS)。筋肉を動かす指令が脳から伝わらなくなる難病で、手

足や呼吸に必要な筋肉が急速に衰えていく。

有効な治療法はなく、患者は発症から平均3年半で、呼吸不全などで死亡する。呼吸不全は、人工呼吸器の装着で乗り越えられるが、家族の介護負担などを気に病み、装着しない患者が7割にのぼるためだ。

徳田さんは、10年前の02年春、ALSと診断された。衆議院議員としても多忙を極めた時期で、「診断の少し前、左手の筋肉の萎縮が起こったが、あまり気にとめなかった。まさか、僕が病気になるなんて思わなかったから」と振り返る。

各地の医師会と対立しながら病院網を広げ、公職選挙法違反の逮捕者が続出する選挙を勝ち抜いて、国政にも打って出た。そんな恐れ知らずの男にとっても、ALSの診断は重かった。

「今までのような活動が出来なくなる。そう考える度、大きな不安と焦りに襲われた」

(このシリーズは全5回)

病で不動の体を車いすに預け、口角を上げてこちらを見る。表情筋の動きも少ないが、それが笑顔であることはすぐに分かった。

気管を切開して人工呼吸器をつけているため、声は出ない。記者があいさつす

ると、男性職員が徳田さんの前にさっと立ち、透明の四角いプレートに徳田さんの顔の前に掲げた。

プレートには、50音のひらがなや数字が書き込まれている。徳田さんの眼球が上下左右に動き、狙った文字の前で止まる。それを男性職員がプレート越しに確認して読み上げ、別の職員